

国際共同研究事業スイスとの国際共同研究プログラム（JRPs） 事後評価結果

研究代表者所属機関・部局・職・氏名 徳島大学・先端酵素学研究所・特命教授・高濱 洋介

研究課題名：胸腺上皮細胞の分化と機能を裏付ける転写エピゲノム分子機構の研究

評 価 結 果	
	S 想定以上に意義があった
○	A 意義があった
	B ある程度意義があった
	C ほとんど意義がなかった
所 見	
<p>本研究は自己と非自己の識別を行うT細胞の分化産生機構を、それを支える胸腺上皮細胞に着目して理解しようとする、意義の高いものである。大きなテーマゆえ論文にまで至っていない項目や計画通りではない展開もあったが、胸腺上皮の分化や機能に関わる分子の同定や、髄質上皮細胞に発現するCCR7受容体リガンドの一つCCL21Serの機能解析、転写因子Foxn1によるβ5t遺伝子制御などについて質・量ともに一定の進展が見られた。</p> <p>国際協働については、毎年国際交流や若手研究者の育成を実現し、極めて有意義な成果をもたらした。具体的には、本研究期間において、研究代表者の研究室からは高水準・高インパクトの研究成果が多数発表されており、極めて高い学術的貢献があった。また、若手研究者に国内外で積極的に研究成果の発表を行わせていることから、若手研究者養成にも大きく貢献している。さらに、日本側及び相手国側研究代表者ともに、世界トップレベルの研究機関への異動を果たしており、今後も当該分野における世界的水準の継続的な国際研究交流活動の実施が期待できる。一方、相互の研究者が相手側の研究室に出向いて専門技術を習得し実験を行う機会がなかったことは、国際共同研究として物足りない点である。</p> <p>胸腺分化の研究は遺伝子改変マウスの掛け合わせに時間がかかり、また、遺伝子解析をする胸腺細胞が少なく、技術的に高度である。多くの若手研究者を育成し、毎年国際交流の場で新たな進展を発表し続けたことは驚嘆に値する。特に、胸腺分化の研究は、すぐに応用にはつながらないが、T細胞に関わる多くの現象を理解するために極めて重要である。着実に成果を積み上げ、若手を国際的な人材に育て上げたことは極めて意義がある。</p>	